

さみしい夜の句会報 第85号 (2022. 10. 2-2022. 10. 9)

- ◆ 参加者しまねこくん、徳道かつみ、石原とつき、かなず梨山 碧、  
小沢史、海月漂、電車侍、さー、白水ま衣、太代祐一、池田吉輝、蔭  
一郎、風池陽一、汐田大輝、ぼっほ、swanyu、花野玖、最中妙、雲心、  
石川聡、西脇祥貴、しろとも、元さん、まつりぺきん、森内詩紋、日  
下昊、おかもとかも、天やん、生・存、秘秘密子、雲上晴也、海馬  
糸瓜曜子、柳川零斗、Reito/Masukawa、あ、鷺沼くぬぎ、和泉明月子、  
Ryu sen、sarasa、灰色ニボシ、星野響、岡村知昭、MIVA、宮坂葵哲  
鶴子、伽羅、日下睦子、むくみんママ、水の眠り、式定住佳、馬勝  
なゆた、西沢葉火、雷(らい)、斌、小間、涼閑、木野清瀬、澱粉、冬  
憑(ふゆつき)、さぶきら、日月星香、相見美緒(あいみみお)、とる  
ぼーる、鴨川ねぎ、東(こう)、同居嫁の吹き、こばやし兩子(不眠  
症の猫、菊池洋勝、桔梗薫、ササキリ、ユウイチ、金瀬達雄、しもじ  
よう、月硝子、千春、ふわふわにゃんこ、休庵、ころんころん、富  
永顕二、輪井ゆう、ゆりのはなこ、抹茶金魚、空瓶、たろりずむ、橘  
月子、Tomoko、岩瀬百、睦月ヨシ、雛子、Hira、やん(砂狐)、ちゅん  
すけ、hyutoppa 突破、やわらかおはけ、河上類、KZU、櫛崎進弘  
山恵、大西貞雄、龍田山門/Rock O'Nori、月波与生(二〇二五)

◆ 7・7詩、5・7・5詩

カモメにも賄賂を渡しておきなさい おかもとかも  
蛇口の何を見て鳥と呼びますか 西脇祥貴  
パッキンを愛に含める中島みゆき 西脇祥貴  
Oの輪裏からくぐるとき中島みゆき 西脇祥貴  
カラフルなすべり台すべり告白 太代祐一  
国土地理院の飲み会はド派手 太代祐一  
虚子の顔だけ並ぶzoomの画面 蔭一郎

人間は神の托卵だよと鯨 蔭一郎  
阿佐ヶ谷姉妹までは晴れ 石川聡  
雑巾へ腕のねじりを移しきる 抹茶金魚  
蘭鑄が火に包まれて落ちてくる 抹茶金魚  
保険屋の特徴的な足捌き おかもとかも  
ラフランス置いて居留守の仕上げとす しまねこくん  
羽の無い天使が君で僕は羽 たろりずむ  
二段ベッドでモールス信号したいわ 海馬  
死にたいと思うくらいで腹八分 弍定住佳  
ほろ苦く焼いておくれよ薩摩芋 しまねこくん  
ドラックス超合金のキリスト像 富永頭二  
卵生の夢には命綱がない 白水ま衣  
スマホ無き夜長無数の待ちぼうけ 月硝子  
自転車が浸透圧で皺々ね おかもとかも  
1メートルと好んで話す春キャベツ ササキリユウイチ  
千切り絵のためにあそこを破く音 西沢葉火  
デコルテに眠りの浅い十二使徒 Ryu\_sen  
彼岸花あなたに飽きたかもしれず 東ころろ  
筆記体さらさら書ける秋の鮎 蔭一郎  
ダンサーはヒカリゴケは予告しかない 石原とつき  
三単現のが笑えば青くなる 石川聡  
紅玉を温めてみて化けるから 木野清瀬  
すこしづつ積み木と秋は冷えてゆく 蔭一郎  
分岐点右も左も杜鵑草 花野玖  
鴨川のカメレオンから叫び出す 岡村知昭  
百歳の木馬がロバを嗅いでいる 岡村知昭  
月齢のスキップされる茶碗蒸し 太代祐一  
入口を決めて真顔の蛇になる しまねこくん  
ホルンだけばらばらになる十三夜 星野響  
プログレの音色ゆがみて鴟の贅 汐田大輝  
多重露光で屑になるまで 海馬

主客転倒　それから波の立たぬ椅子　西脇祥貴

叩きつけ割れた南瓜を愛す河馬　かなず

暖をとる有刺鉄線抱きしめて　小沢史

人げんが入っていますさあどうぞ　海月漂

曇天や　廃園の中　破芭蕉　電車侍

友達がゴールを持って逃げていく　さー

新聞紙ああ快感と燃えていく　流天

外葉までみじん切りするキャベツかな　風池陽一

手のひらに錠剤三つ水澄めり　ぽっぽ

音符消えればピアノは鳴らず秋寒し　syusyū

宇宙の窓アンドロメダへ秋深き　雲心

お釈迦様電化製品フェスティバル　まつりぺきん

涙ばかり溜まるバスタブ秋深し　天やん

十三夜ますかけ線の上であり　雲上晴也

宵越しの言葉は持たぬ空に蒔く　糸瓜囃子

辞世の句にするギャグをください　しろとも

いわし雲もやっぱり骨があるかしら　あ

後の月なれど名の無き月をこそ　鷺沼くぬぎ

笑みひとつ心の萎えて空高し　和泉明月子

寒露花束みたいなランジェリー　saryusa

この夜に織り込み済みのさみしさか　灰色ニボシ

後戻りしなくていいと鰯雲　MIVA

サービス料有料なのにただ残業　宮坂愛哲

秋寒や雨の公園人気なく　鶴子

石榴食ふ鬼神は今日もをとこ抱く　伽羅

銀河からきた者だろう星きれい　日下踏子

秋霖の夜空の四辺に飛び乗って　水の眠り

置いてけぼりの冷たい雨の日だった　むくみんママ

欲望が矛盾する頃毛が生える　馬勝

疲れ果てた神輿が通り過ぎた墓地　雷

バブルバス入るとレオン思い出す 斌

十字架を背中に彫って泣かぬこと かづみ

あれは茄子、嫁さんが食う方のナス 小間

夜帳を窓のくすみで反射する 澱粉

湯豆腐を一人つつき曇る窓 冬憑

冬隣銀杏拾いに臭い避け 日月星香

言葉は生きる為の祈り 相見美緒

あなたの「シャツで寝る秋の夜」とるはどーる

遺言はちくわの中に書いてきた 鴨川ねぎ

ポジティブな言葉吐く度鎌光る こばやし南子

秋分の日を跨ぐ延長料金 菊池洋勝

さみしい月夜に秋風慰め 黎明

共同便所で幻想論にシバかれる 金瀬達雄

とんこつのスープをよけるナナカマド しもじょう

寝室の壁に映るは我が夜の隙間。 ふわふわにゃんこ

亡きねこの髭をひろって三千里 ころんころん

人間の取説を読みだした猫 空瓶

湯豆腐もずぶ濡れになるときがある 橘月子

半分の月が出ていた 娘待つ Tomoko

遺伝子の雀蛤への散歩 岩瀬百

スランプと言うほど積んでいなかった 睦月ヨシ

待つてると言えない路地に曼珠沙華 雛子

回収の出来ぬ環状線 さい

メロドラマEDは似合わない ちゆんすけ

十月の涙の色を、素と答ふ hyuntoppa

白夜行きみの背骨を回遊す やわらかおぼけ

銃を持つマリオネットに糸がない 月波与生

◆ 7・7、5・7・5以外の短詩

生きていく時間の果てに置いてきたあらゆる記憶の紛失届  
最中妙

殴られたように痛い体中菊の紅色鮮やかさ増す 千春

じゃあ次は貴女の番ねと笑う魔女 お前の呪いはあたしに

効かない 最中妙

早々にあつたかゝいはいは売り切れてつめたさだけが並ぶ自販

機 さー

じゃあ次はあなたの番と指さされ単三電池二本受け取る

蔭一郎

嫌ならば「俺は嫌だ」と拒否しなよ 「俺ら」と主語を大

きくするな 鈴音

嘘つきだよねで終わるはずだったコルチカムと目が合う前

までは しろとも

秋の風冷たい空気吹き込んでコロナじゃなくて風邪をひき

そう 元さん

どうやって僕を救うというのかね？玉葱1つ刻めぬくせに

森内詩紋

十三夜の甘露いつも貴方は笑っているの問いかけ 日下昊

僕たちは全て季節の変わり目のせいにしてまた暦をめくる

生・存

月よにきみを照らしてその頬へおちる涙をぬぐえたのな

ら 柗 秘密子

空見上げ吐息がふ、と流されて不意に感じるあなたの香り

柗川零卜

一人寝の寂しさ沁みる 枕辺に 花散らしの雨が降る夜

なゆた

ナポリタンふやけておいらに巻きついたあの日の「階床は

ツートン さぶさきち

最後には家族の誰も知らぬ名を呟くだろううつし世は夢

同居嫁の呟き

リンゴ剥く訛りの母の音がするリンゴ売り場のリンゴを眺め  
ゆりのはなこ

◆ 詩

君はどんな気持ちで  
ご飯を食べてたのかな。  
そう考えると胸が痛いのです。  
生きづらかったよね。  
しんどかったよね。  
生きづらさを抱える者として少し理解できる…  
何も気にせんでいいから  
ゆっくり ゆっくり休んでね。  
綺麗な景色を見せてくれてありがとう。  
またね。(休庵)

遠くの方から僅かに聞こえる街の喧騒  
そこかしこから聞こえてくる  
人々が生活している音  
木々の葉が風で揺れる音  
ひんやりとした空気  
ロンドンの住宅街を歩いてるみたいだ  
あの時見た空に似てる  
揺れている 喧騒と静寂よ少し寒い  
(Hina)

◆ 作品評から

国土地理院の飲み会はド派手 太代祐一  
くそうなんだ(河上類)

八代亜紀俺の中では冬の季語 馬勝

〜川柳は「俺の中」を表現するルートだ。だから「あな  
たと同じ」を嫌う。上手な平凡より下手な奇抜を面白がる。

「俺の中」をどんだん表現してほしい。(月波与生)

柘榴食ふ鬼神は今日もをとこ抱く 伽羅

〜良い街ですよ。夏目漱石のお墓行きたいです。(KANU)

モザイクが第二関節まできてる おかもとかも

〜あやしげなものを隠すために使われるモザイク。モザ  
イク除去機は高価だったがソレは見えたのか。モザイクが  
消え虚無とは何か？を知れば幼年期の終り。(月波与生)

本名で呼べば出れなくなる花野 蔭一郎

〜雅号で生活することが多くなり相対的に本名を知って  
る人が少なくなつた。句会で突然倒れて救急車を呼ぼうに  
も誰も本名を知らない。そんな密室的川柳空間がとて居  
心地がいい。(月波与生)

お釈迦様電化製品フェスティバル まつりぺきん

〜大事な物が壊れてしまうことを「お釈迦になる」とい  
います。長い間使つて愛着があるけれど、壊れてお釈迦様  
になつた電化製品がズラリと並んだフェスティバル。なん  
て幸福な空間なのでしょう！(西沢葉火)

ため息がきれいにみえるシャボン玉 Kubotahiroko

〜せんそうが終わらない国のシャボン玉吹きが集まつて  
いつせいにため息をつく。無数のシャボン玉で世界中が満  
たされるときどくさいしやおろかさをする。(月波与生)

パッキンを愛に含める中島みゆき 西脇祥貴

〜無償の愛ですね。(檜崎進弘)

いわし雲もやっぱり骨があるかしら あ

〜え。 あるの!! て事は食べれるんだ(山恵)

秋寒や雨の公園人気なく 鶴子

〜名句―素晴らしい。私は、駄句を偶にひねって  
いますが・・・。(大西貞雄)

写真館の青空が勘違いしてる 抹茶金魚

〜「成人式の写真、まだ近所の写真館で飾ってて恥ずかしくって…」と女性がいった。「もうさげて下さいって言ったら、日焼けするから室内に移しますって…」とあまり困ってなさそうに笑った。写真館の写真のように。(月波与生)

恋人の名を持つお菓子菊日和 花野玖

〜旅先でのことだろうか。いったいどんな味がするのだろう。買って帰りたいくもあり食べたくなし。(月波与生)

夜の案山子昼の案山子とすれ違ふ しまねこくん

〜スタニスワフ・レムの短編の人類が1日に1日しか目覚めない世界で、水曜日に生きる男が火曜日に目覚める女性に恋をする、といった話(うる覚え)を思い出した。(月波与生)

ト長調のペンギンしかいなかった 白水ま衣

〜素っ惚けた感じで面白い。ト長調にしたのも嫌味がない。この嫌味がないというのは作句する上での大いなる美点。(月波与生)



蘭鑄が火に包まれて落ちてくる 抹茶金魚

　　↳ 蘭鑄は燃え上がる。あの火脹れした貌を見よ。火炎のやうな尾を見よ。空から被弾した機体が墜ちてくる。火だるまになつて何機も何機も墜ちてくる。予感。幻視。視ること。要研究（龍田山門/Rock O Novel）

人間は神の托卵だよと鯨 蔭一郎

　　↳ 鯨に言われたら納得しちまうなあ……（森内詩紋）

0の輪裏からくぐるとき中島みゆき 西脇祥貴

　　↳ はメビウスの帯。同地点の裏表に哀と樂があつてそれは同じ平面にある。（檜崎進弘）

宵越しの言葉は持たぬ空に蒔く 糸瓜曜子

　　↳ 「撒く」ではなく「蒔く」というのが、捨てるのではなく、行き場のない感情もまた何かの種になるという感じがして…好きです（なゆた）